

虚構

道元思想学会 第二回討論会

## 宗学とは何か

角 田 泰 隆

\*この「道元思想学会 第二回討論会」は、文字通り「虚構」であり、実際に行われたものではありません。しかし、すべてが虚構なのではなく、今時、駒澤大学・駒澤短期大学の一部の仏教学者の間で問題となっている「宗学とは何か」という議論を取りあげたものです。本稿の目的は、駒澤短期大学仏教科の学生、および本論集の読者に、このよ

うな議論の存在、及びその内容を知っていただくことにあり、出来るだけわかりやすく、興味を引くようにするために、便宜的に「討論会」という形をとったものです。私自身、この議論の論者の一人であるため、自らの立場の主張に力が入る部分があると思われませんが、できるだけ客観的な立場で、この問題を取り扱うことにとめたつもりです。登場人物(この討論会の出席者)、及びその発言は当然のことながらすべて虚構ですが、その発言の内容には、この議論に関心を持つ様々な人(先生、学生、学生OBなど)から私が聞いた意見、感想等も含まれております。また、特別に、私の意見の代弁者として「大円(おおまる)さん」を参加させております。いや「大円さん」はまさに私です。お気をつけ下さい。最後に、本稿には「角田先生」が出てまいります。本稿の性格というか体裁上、自ら「先生」と付きざるを得ないことをご了承下さい。

一九九八年七月十日(金)曇り

道元思想学会 第二回討論会 午後一時開会

〔司会〕 それでは、只今より道元思想学会、第二回討論会を

開催いたします。私、司会をつとめさせていただきます。久保村でございます。よろしくお願いいたします。

今回のテーマは「宗学とは何か」ということでございます。今般、「宗学」についての論議が起こっていること

はご承知の通りでございますが、その辺の動向について、まず「宗学」を専門分野とされており、横山先生の方から、ご説明いただきまして、そのあと自由討論というかたちで、いろいろと自由にご発言をいただきたいと思っております。今日は当事者の先生はお招きしておりませんが、それぞれどうぞ忌憚のないご意見をお述べいただきたいと思っております。それでは、横山先生、よろしくお願いたします。

〔横山〕横山でございます。私も「宗学」を専攻しているものであります。私には私なりの意見もあるのですが、それはまた後ほど、申し上げる機会があると思っております。ここでは「宗学とは何か」ということについての論議の動向についてまず、私なりに捉えているところを申し上げて、この討論会のたたき台にさせていただけたらと思っております。

資料を作りまして配布いたしました。近時、提案されました四つの「宗学」の定義を挙げておきました。その資料をご覧いただきながら、論議の経緯をお話させていただきます。

配布資料

「批判宗学」

1. 「いかなる対象も絶対視・神秘化することなく、絶えず自己自身を否定しつつ、宗門の正しい教義を探索すること」
2. 「いかなる対象」とは、  
「いかなる人物(宗祖)、テキスト(宗典、經典)、行(坐禅)、教義(縁起説)等」を意味する。
3. 従って、批判宗学は、密教の否定である。
4. 批判宗学は、宗祖無謬説に立たない。一切の guru(尊師) 崇拜を排除する。
5. 道元の思想的変化を認め、道元が目指そうとしたもの(正しい仏教)を、目指す。
6. 批判宗学自身の見解は、縁起説であり、行は、縁起説にもとづく誓度一切衆生(自未得度先度他)の行である。
7. 批判宗学は、本質的に、社会的(「誓度一切衆生」でなければならぬ)。
8. 曹洞宗は、『弁道話』の見解と行、即ち、如来藏思想(「仏性顕在論」と神秘的密教的坐禅(「一寸坐れば、一寸の仏」)を捨て、後期道元のものと思われる「深信因果」(縁起説)と「誓度一切衆生之坐禅」にまで、進むべ

きものと思われる。

(松本史朗「伝統宗学から批判宗学へ」『宗学研究』  
第四〇号、一九九八年三月)

### 「僧宗学」

イ、広義において、宗学を「曹洞宗に関わる学問」と見る場合、基本的に左記に関する学問である。

①両祖に関する歴史的(伝記)・書誌的(著作)・思想的研究、および、それと関わるその周辺の研究。

②両祖の思想的母胎(それ以前の仏教教理・人物等総てを含む)に関する研究。但し、両祖の思想との関係の問題としたもの。

③両祖以降の曹洞宗に関わる人物の歴史的(伝記)・書誌的(著作)・思想的研究、およびそれと関わるその周辺の研究。

④曹洞宗に関わる事象の研究。

ロ、狭義において、宗学を「宗旨の学問」と見る場合、基本的に左記に関する学問である。

①道元禅師の教義に関する研究。

\* 瑩山禅師の教義に関する研究も同等に重要であるが、教義においては、道元禅師が歴史的に瑩山禅師に先行すること、および主な研究対象である著作が膨大なこと、また瑩山禅師の教義も基本的に道元禅師に依っていると考えられる(但し、両祖

宗学とは何か(角田)

は別人物であるため、当然教義の差違はあり得ることから、ここでは一応道元禅師に限定する。

\* ①は、現存する道元禅師に関わる文献に基づく研究であり、その結果において「道元禅師が目指そうとされたもの」を研究者が推測し、研究者がそれを目指すことは、研究者の私的生き方の問題であり、「宗学」とは言えない。

②①の研究に不可欠な歴史的(伝記)・書誌的(著作)研究。

ハ、ロにおける宗学は、左記の研究方法をとるべきものであると考える。

①道元禅師無謬説に立つ。

\* 無謬説に立たない場合、道元禅師の教義について、自らの判断において正邪を決し取捨選択することにつながり、研究の基盤(土俵)が崩れる。

②道元禅師の著作について、己見を持って取捨選択しない。

\* 初期の著作を排除したり、晩年の著作のみを重視しない。

\* 道元禅師の著作について、道元禅師自らが書き改めるか、あるいは自らその誤りを明示していない限り、道元禅師の著作総てを、道元禅師の研究の資料として認める。道元禅師が明言していない限り、道元禅師がその著作の内容について認められていたものと受け取る。

③道元禪師に思想的変化を認めない。

\*道元禪師の説示の違いを、思想の変化と受け取らない。即ち、説示の変化(相違)については、道元禪師が自ら述べられていない限り、短絡的に思想(自内証)の変化とは受けとらず、外的要因に応じての変化、対機、真実と方便、弘法と救生、その他について、種々の可能性を考究する。

④道元禪師の教義を、その文献に基づいて、可能な限り客観的(\*主観を完全に交えないことは、おそらく不可能であろうから)に研究する。

⑤道元禪師の教義を、あらゆる思想(縁起説・人権思想等)によって切らない。(いかなる論説、思想、主義主張であっても、それに基づいて、道元禪師の教義を価値判断し、優劣・正邪を論じない。もちろん、そのような学問は当然認められるが、それは「宗学」には属さない。)

(角田泰隆「宗学考」へ「宗学研究」第四〇号、一九九八年三月)・同「批判宗学」批判」へ「駒澤短期大学研究紀要」第二六号、平成十年(一九九八)三月)

### 「新宗学」

1. 研究対象は道元禪師とする。
2. 道元禪師の「信念」の相対化を目的とする。如浄禪師の教えの道元禪師の表詮の意味を問う。「道元禪師の日本

的展開」とは何か」と言い換えることが出来る。歴史と超歴史の解明。

3. 道元禪師のいう仏祖の言葉の仏教化を明らかにする。禪宗批判の内面化であり、禪宗否定ではない。道元禪師の「誤史」と「誤読」の「要請」を究める。

4. 道元禪師のいう仏祖の行の正伝の仏法化を明らかにする。

5. 研究の主体は正伝の仏法の信者でなければならない。仏教信者でない道元禪師の研究者を意味しないし、曹洞宗の僧籍は問わない。

6. 方法論としては、思想史を使用する。

7. 新「宗学」の思想史は、過去の「仏教学」からも未来の教化学からも批判を受けながら、自己否定を通して、常に「新しい」宗学を目指す。

8. 逆に新「宗学」から補助学の仏教学へ、あるべき教団の教化学へ提言できる視点を提示する。

9. A、仏祖の信念から、B、客観への仏教学を基礎とし、C、新「宗学」を経て、D、教化学への提言を果たし、超歴史的Aの循環を試み、純粹宗学への道を問いつづける。

### 「参考」

10. 角田・松本説に対する新「宗学」の立場。
- (イ)道元禪師無謬説には立たない。
- (ロ)道元禪師の「正法」とは何か、の追求に限定する。
- (ハ)可能な限りの客観的方法を用い、最終的には主観の

判断であろう。歴史学として純粹の客観ということはありません、という立場に立つ。

(二) 道元禪師の思想的變化は、資料批判の後の文献成立史に基づいて認める。ただ、「無謬」「正しい」「客観」「思想的變化」のとらえ方は、常に新しく自己批判すべきであることは、共通の課題としておきたい。

(石井修道「宗学・禅宗史と新「宗学」(一)、一九九七年度第四回曹洞宗宗学研究所公開研究会へ一九九八年一月二十七日開催) 発表資料一〇頁)

### 「やさしい宗学」

1. 既に修得している既知の知識を大切にし、次に未知にチャレンジし、更に無知を恐れる学問の立場。
2. 出来るだけ分かり易く、自分の意見を表白し、分かっていることと分かっていないことのけじめを付け、予想も出来ない無知性のあることを認める。
3. 研究対象を出来るだけ丁寧に扱い、優しく見護り、それを最大限活かす研究。
4. 自分を卑下することなく、高ぶることなく、我慢することなく、道元と対対の視線を持つ。
5. 道元にも色々の問題点が存在し、批判すべき面があることを認める。但し、そこに安易に自己の価値判断である正邪や善悪を持ち込み、道元の一生のある部分のみを肯定し、他を否定するようなことは、全体的に人間を

宗学とは何か(角田)

理解する視点からは、その人物を活かして理解するよりも、殺してしまうことになりかねない。

人間研究において大切なのは研究者の「柔軟心」、忍辱の実践であり、我慢して、必要以上に礼讃したり、批判のための批判をしたりするのではなく、相手の問題点を相対化し、全体的に柔軟に理解する。現実の生きている人間を理解するように道元に対する。

### 6. オープンな宗学

単に曹洞宗一宗の自己と言うだけではなく、自己の中に出来るだけ多くの宗派を位置づけ、また仏教だけでなく、異宗教をも位置づけて、観察し、考察する。

### 7. 責任性が問われる宗学

その当人がどのような社会的行動をとり、どのような内容を発信して行くかという責任性が問われる。

### 8. 個人に由る宗学

集団的に何かを行うということではなく、個人の具体的行動、個人の責任の発揮、個人の自由と責任のところに、仏教自立、再生、活性化の道がある。

(\*平成十年六月二十四日に行われた曹洞宗宗学研究所主催一九九八年度第三回公開研究会の吉津宜英先生の資料をもとに吉津先生が提唱する「やさしい宗学」を私が恣意的に八つにまとめたもの。)

「批判宗学」というのは、駒澤大学仏教学部教授の松本史朗博士の提案されたものですが、これは、曹洞宗宗学研究所公開研究会において、「批判宗学の可能性」という演題で三回(一九九七・五・二一、六・四、六・一八)にわたって行われた松本先生の講演において提唱された「宗学」です。これはまた、一九九七年一月一八日開催の宗学大会においても「伝統宗学から批判宗学へ」と題して発表され、『宗学研究』第四〇号(一九九八年三月三十一日発行)に掲載されております。

次の「信宗学」というのは、これは私が便宜的に付けたものですが、駒澤短期大学仏教科助教授の角田泰隆先生が、松本先生の「批判宗学」に対して提示したもので、角田先生は自ら「信宗学」などとは言っていませんが、信仰的な神学的な印象を受けますので、「信宗学」といたしました。角田先生からは異論がありそうな気がします……。これは、やはり、一九九七年一月一八日開催の宗学大会において「宗学考」と題して発表されたもので、『宗学研究』第四〇号(一九九八年三月三十一日発行)に掲載されております。この後、松本先生の「批判宗学」に対する具体的批判である「批判宗学」批判」を発表しています。これは『駒澤短期大学研究紀要』第二六号(一九九八年三月)に掲載されています。

次の「新宗学」ですが、これは駒澤大学仏教学部教授の石井修道博士による新しい宗学の提案です。石井先生ご自身は、新「宗学」とされていますが、便宜上「新」も括弧に入れて、ここでは「新宗学」といたしました。と、ご了承ください。これは、曹洞宗宗学研究所公開研究会において、「宗学・禅宗史と新「宗学」」と題して三回(一九九八・一・二七、二・三、二・一七)にわたって行われた石井先生の講演において提唱された「宗学」です。講演資料の中から引用いたしました。

最後の「やさしい宗学」ですが、これは駒澤大学仏教学部教授の吉津宜英博士の提案する宗学論です。これは、そこにも書きましたが、平成十年六月二十四日に行われた曹洞宗宗学研究所主催一九九八年度第三回公開研究会の吉津宜英先生の資料をもとに吉津先生が提唱する「やさしい宗学」を私が恣意的に七つにまとめたものです。吉津先生ご自身が箇条書きにまとめておられませんので、これも便宜的にわかりやすくするために、私がまとめてみました。このまとめ方は、吉津先生ご自身のものではない点、ご承知おきいただきたいと思えます。

そこで、この問題の経緯について私なりにうけとっているところを簡単に述べますが、一番先行するのが松本先生の「批判宗学」です。これは松本先生ご自身が

しゃっているように、袴谷憲昭先生の「批判仏教」から大きな影響をうけて生まれてきた考え方です。この言葉が最初に使われたのは、松本先生が曹洞宗門の、ある現職研修会（一九九六年二月）で「伝統宗学の諸問題について」という演題を与えられて、伝統宗学とは何かという問題を考えてみた結果、伝統宗学に対立するものとして「批判宗学」というものを構想した、と言われています。その内容は、資料にある通りですが、そのポイントは、「4・批判宗学は、宗祖無謬説に立たない」と「5・道元の思想的変化を認め、道元が目指そうとしたもの（正しい仏教）を、目指す」であろうと思います。

これに真つ向から反論したのが、角田先生の「信宗学」です。つまり、まったく逆のことを言ったわけです。資料の「信宗学」のハの①と③ですね。「①道元禪師無謬説に立つ」というのと「③道元禪師に思想的変化を認めない」というところが、①も③も共に信仰的な色彩が強いので、私は「信宗学」などとしてみたのですが、角田先生がこのように言った背景には、信仰というよりも、「道元禪師の著作のすべてを研究の対象として肯定的に受け取る」ということを基本にしているということがあったようです。特に、『正法眼蔵』については、道元禪師自らによって晩年に及ぶまで手が加えられたものであり、

宗学とは何か（角田）

そのすべてを道元禪師が認めていたとするのです。このことが宗学の大前提であるとするわけです。

これら「批判宗学」と「信宗学」に対して出てきたのが石井修道先生の「新宗学」です。「新宗学」では、「批判宗学」と「信宗学」を対立するものとみながらも、両者ともに「主観的」象限に割り当てて、自らの「新宗学」を「客観的」象限に入れていく点が特徴的です。「批判宗学」を「主観的」象限に割り当てているのは、松本先生の批判宗学における「正しい仏教」の定義にはそもそも私にとって縁起とは、第一に十二支縁起であり、私は「律蔵」「小品」に従って、釈尊は十二支縁起をさとしたと信じる。つまり私にとって仏教とは縁起に他ならない。十二支縁起の説が後の成立であることは私も認めるが、にもかかわらずなお私は釈尊は十二支縁起を悟ったと主張する。（松本史朗『縁起と空―如来蔵思想批判』）

という信（主観）が根本にあると見なしていることによるのであると思われまます。これに対して石井先生はあくまでも客観の立場に立つということでありましょう。それともうひとつ、角田説の「無謬」と松本説の「正しい仏教」に対して批判的である点があげられるでしょうか。ところで、石井先生は、資料の「10・角田・松本説に

対する新「宗学」の立場」を示されています。

(イ)道元禅師無謬説には立たない。

(ロ)道元禅師の「正法」とは何か、の追求に限定する。

(ハ)可能な限りの客観的方法を用い、最終的には主観の判断であろう。歴史学として純粹の客観ということとはありえない、という立場に立つ。

(ニ)道元禅師の思想的变化は、資料批判の後の文献成立史に基づいて認める。

の四点についてですが、(イ)と(ニ)については松本説と同じで、(ロ)については、松本説の「1・宗門の正しい教義を探求する」と同様であり、角田説として「道元禅師の教義に関する研究」という点では重なるものがあり、(ハ)については二者ともに同じだと思つたのですね。「批

判宗学」の根本に「主観」があると言っても、松本先生はそれを文献に基づいて客観化しようとしているわけですし、また角田先生も、「無謬説に立つ」とはいえ、ハの④にあるように「道元禅師の教義を、その文献に基づいて、可能な限り客観的に研究する」としているわけですし……。ですから石井説は、角田説とは(イ)と(ロ)において相容れないとしても、松本説とは、いまひとつ明確な相違が見えてこないような気もするわけです。

さて、これらを見据えるかたちで出てきたのが、吉津先生の「やさしい宗学」です。「4・道元と対対の視線を持つ」というあたりがポイントだと思われれます。具体的に言えば「我慢して、必要以上に礼讃したり、批判のための批判をしたりするのではなく、相手の問題点を相対化し、全体的に柔軟に理解する。現実の生きている人間を理解するように道元に対する」というところでしょうか。それから、「出来るだけ分かり易く、自分の意見を表白する」ということも、「やさしい宗学」の特徴です。吉津先生は、これからの「宗学」はそうあるべきだと提案されたわけです。

さて、ずいぶん長くなりましたが、以上、「宗学」に関する最近の議論を私なりにまとめてみました。

〔司会〕横山先生どうもありがとうございました。お集まりの皆さんの中にも、宗学大会や宗学研究所主催の公開研究会に参加された方もおられるでしょうし、また横山先生とは違った受け取り方をしている方もあると思います。そのへんも含めて、自由に意見を述べて頂きたいと思ひます。

〔唐木〕まず、「宗学」という言葉についてですが、この「宗



というのが、まず問題だと思います。つまり、これが、「曹洞宗」の「宗」なのか、おおもと本源という意味の「宗」なのかということですが。

「曹洞宗」の「宗」ということになれば、これは曹洞宗の学問、すなわち「曹洞宗学」ということになりますから、曹洞宗に関わる学問研究すべてを含むことになりません。先の「信宗学」の定義の、「イ、広義において、宗学を「曹洞宗に関わる学問」と見る場合……」にあたると思います。

「おおもと」「本源」という意味の宗ということになれば、言葉が適切か分かりませんが、真実・真理を探究する学問ということになります。この場合の宗学も、さらに二つに分かれると私は思うのですが、まず一つは、道元禪師が「宗門」とか「正宗」というようなものですね、つまり「正伝の仏法」ということになります。道元禪師は自ら伝えた仏法を「正伝の仏法」と言って、決して「禅宗」とか「曹洞宗」と言われなかったわけですから、道元禪師のところまでもっていきますと、「宗学」というのは「曹洞宗学」とはならないわけですね。それから、もう一つは、道元禪師をさらに遡って、「正しい仏法を」「宗」ということもできるわけです。だから、松本先生の「批判宗学」の5の「道元が目指そうとしたもの（正しい仏

教）を、目指す」というのも、この意味では「宗学」ということになるわけです。

〔大田〕私も駒澤大学で学びましたが、やはり宗学を中心に勉強しました。卒論の指導教授は石附勝龍先生でしたが……その後、改姓されて新井先生となれました……まさに新井先生は自他共に認める「伝統宗学」の先生でしたから、私も「伝統宗学」をみっちり仕込まれたことになりました。卒論指導では、よく研究室に通いましてね、いつも何時間も指導を受けました。よく面倒を見て下さったなど感謝しております。

そのころは「伝統宗学」とは何かということとはよく分からなかったのですが……まあ、いまもよく分かりませんが……とにかく、『正法眼蔵註解全書』というのがありましてね、あれによって『正法眼蔵』を読んでいったわけです。

\* 『正法眼蔵註解全書』……『正法眼蔵』の段落ごとに『御抄』（道元禪師の直弟子、詮慧の『御問書』とその弟子経豪の『正法眼蔵抄』）や、斧山玄鍬の『聞解』、雑華藏海の『私記』、天桂伝尊の『弁註』、父幼老卵の『那一宝』などの江戸期の宗学者の注釈を編集したもの。

それに加えて、西有穆山禅師の『正法眼蔵啓迪』とか、岸沢惟安老師の『正法眼蔵全講』とかも拠り所としたわけです。大学院で河村孝道先生の授業を受講した時も、やはり『註解全書』を参考にしながらの演習でした。最終的に『正法眼蔵』を受けとるのは、自分自身であっても、己見に陥らないためにも、先学の解釈を学ぶことは、必要なことであるからでしょう。ですから私は、「伝統宗学」というと、『註解全書』や『啓迪』や『全講』を参考にして『正法眼蔵』をよんでゆく、そういう研究方法だと思っていたんですが……。

〔横山〕「伝統宗学」に関連してなんですが、よく取りあげられるのが、樽林皓堂先生の「伝統宗学」の定義ですね。つまり「伝統宗学とは、道元禅師に親しく接した直弟子である詮慧の『聞書』と、詮慧の弟子経豪の『抄』を最高の注解となし、その解説を至上として仰ぐ一派である」(『道元禅の本流』、大法輪閣、一九七七年十月)という定義です。「伝統宗学とは、……一派である」というのは、ちよつと変な表現ですが、これによると、『聞書』と『御抄』を重んじる学派ということになりますね。私は、江戸期の注釈なんかも含めたかたちで、「伝統」とするべきではないかと思うのですが、このへんの問題と、それか

ら、「伝統宗学」というのは、学問であると同時に学派であるという、この派閥と捉える問題と、この二点に注目するのですが。

〔岡田〕先ほど大田さんが、「伝統宗学」というのは研究方法ではないかと、そういわれましたね。そのへんのところがポイントだと思うのです。先日、仏教学部の岡部先生とお話ししてありましたら、岡部先生が、「宗学」というのは、対象の問題ではなくて、方法の問題だと思うのですが、いかがでしょうか？」とっておられました。私も、「宗学」というのは、方法論だと思うのです。まあ、学派という受け取り方もあると思うのですが、現実的にそういう学派は……つまり師弟関係の上でのといいますか、そういう一派は……ほとんど消滅してしまっているわけですから、研究方法論という視点で「伝統宗学」を捉えたほうがいいと思うのです。つまり、『正法眼蔵』を解釈、研究するのに『聞書』や『抄』によっていくという研究方法、ということになりましたか。これに、江戸期の注釈書や、あるいは『啓迪』とか『全講』とかを加えるかどうかは、また、そこからの問題です。

〔司会〕とすると、「伝統宗学」というのは、『正法眼蔵』の研

究に限られるわけですか？

〔岡田〕まあ、そういうことになろうかと思えます。しかし、一般に言われている「宗学」、あるいは、今問題になっている「宗学」というのは、『正法眼蔵』の研究に限られているわけではないですから、「伝統宗学」と今の「宗学」とは切り離して考えていった方がいいと、私は思います。

〔横山〕そうですね。「新宗学」では「1. 研究対象は道元禅師とする」とありますから、瑩山禅師の研究はもとより、他の曹洞宗に関わる研究は含まれないことになります。石井先生は、他の曹洞宗に関わる研究を何と呼ばれるのでしょうか？

それに対して「批判宗学」は、それらに対しても、またあらゆる宗派の宗学にも当てはめ得るようなところがあります。つまり、「批判宗学」は「宗学」とか「宗門」とかの部分を「仏教」に入れ替えればそのまま「批判仏教」になるような定義ですからね。言葉を入れ替えた場合の「批判仏教」が、袴谷先生の「批判仏教」……袴谷「批判仏教」とでも言うておきますが……この定義と重なるのかどうかは興味深い問題ですが、この「批判宗学」はまさに、松本先生の「批判仏教」……松本「批判仏教」

宗学とは何か（角田）

であると思うのです。袴谷「批判仏教」と松本「批判仏教」、「批判仏教」Hと「批判仏教」Mとでもしましょうか……これは面白いですね。

〔大田〕だからですね、「批判宗学」は松本「批判仏教」でいいわけですよ。別に敢えて「宗学」としなくてもよいと思うのです。松本「批判仏教」によって、道元禅師なり「宗学」なり曹洞宗なりを批判研究すればいいわけで、それによって「宗学」の外側から、「宗学」や曹洞宗を刺激していけばいいわけです。それは大いに意義有ることです。しかし、「宗学」自身が「批判宗学」にならないければならないということには私は反論いたします。

〔唐木〕「批判宗学」の提唱は、袴谷先生の「批判仏教」に大きな影響を受けているということですが、そもそも、「批判仏教」の立場から「宗学」を取り上げることに間違いがあるのではないのでしょうか。つまり、そのような方法論を「宗学」に当てはめること自体に問題があると思うのです。

松本先生は、「縁起説」という「正しい仏教」で、「宗学」を切つてゆくわけでしょう。それは、やはり「批判仏教」だと思つたのです。別に「宗学」と言わなくてもよいわ

けです。つまり、道元禅師の著作(文献)を、「正しい仏教」の立場から、批判して行けば、つまり、正邪を決していけばよいわけで、なにも、そのような方法論に、あえて「宗学」という名を使わなくてもいいと思うのですね。そうじゃないでしょうか？

〔黒岩〕私は、教祖、宗祖といえども、神秘化し無批判的に追従して、他の批判に全く耳を貸さない態度は否定されるべきだと思います。そのような宗学や道元研究は、世界から相手にされないのではないですか？ 今後はやはり「批判宗学」や「新宗学」や「やさしい宗学」といった視点が必要になってくると思います。

〔唐木〕私も黒岩さんと同じ意見ではあるのですが……、しかし、一方ではですね、一切の崇拜を排除するというのは、どうかと思うのです。宗派中の宗祖崇拜は当たり前なことではないのですかねえ。ただ、「宗学」というように学問として見た場合には、信仰的な面は出さずに、客観的研究をすべきですね。

〔司会〕ところで、話題をかえますが、釈尊と道元禅師とどちらをとるんだ、というような乱暴な発言もありました

ね。

〔横山〕松本先生が『普勸坐禅儀』の「善悪を思はず、是非を管することなかれ。心意識の運転を止め、念想観の測量を止めて……」という部分は思考の停止を言うのであって、思考の停止は仏教ではない、つまり『普勸坐禅儀』のこの一節は仏教に反するものであると批判されたときですね。

それに対して角田先生が、「もし、それが仏教でないとするれば、私は、そのような仏教であれば捨て、非仏教である道元禅師の教えをとりたい」と言いましたね。まあ、「売り言葉に買い言葉」というか……失礼、「開き直り」というか、……袴谷先生も「学問に、開き直りは、ちょっとどうかなあ？」などと言っておられましたが、道元禅師の教えの中に、「正しい仏教」と違う部分があるとなると、「正しい仏教」とは何かという問題はさておいて、これは大きな問題になるわけです。つまり、「宗学」になって、釈尊と道元禅師とどちらが大切かという議論にもなってしまうんですね。そこで、そんな発言も出てきたのではないのでしょうか。

〔小林〕ところで今『思考の停止』という問題が出されました

たが、『普勸坐禅儀』の思考の停止は、相對（日常）の次元の思考を停止することで、その停止と同時に絶対（本質）の次元に思考が移りますので、思考そのものの停止とは違ふのではないでしょうか？ 相對から絶対へと思考が移るとしますと、九次第定で言えば初禅の段階になります。『普勸坐禅儀』は普く人々に坐禅を勧めたものですから、そこでは坐禅中に相對的な、つまり日常の次元の思考を停止することをまず説かれたのではないのでしょうか。

〔岡田〕そうですね、伝統的な解釈でも、決してあの部分は、思考そのものの停止であるとは解釈しておりません。「非思量」ですね。「思量にあらず」ではなくて「非の思量」です。

具体的には、仏になろうという思惑を捨てるといふことなんだと私は思いますが、それが「正しい仏教」ではないと言われるとちよつと困りますね。

〔司会〕なんだか「非の思量」などという難しい話になりましたが、ちよつと話題を戻しまして、釈尊と道元禪師のどちらをとるのか、という問題がでしたが、それに關係してどなたかいかがですか？

宗学とは何か（角田）

〔原〕ちよつとよろしいでしょうか。釈尊か道元か、ということですが、仏教徒であるからには、やはり釈尊が第一だと思いますね。道元も釈尊を非常に信仰しているわけですから。

〔大田〕それはそうなんですよ。釈尊が第一なんですよ。その釈尊を何を通して見るかということですよ。アビダルマという穴から見ると、大乘仏典という穴から見ると、中国禪という穴から見ると、道元禪師という穴から見るのか。角田先生が「釈尊よりも道元禪師をとる」というようなことを言ったのは、開き直った感じで、その点が角田先生をよくない点ですが、どちらをとるといふのではなくて、道元禪師を通じて釈尊を見ていくということだと思います。道元禪師の尊敬する釈尊は、道元禪師の著作のなかに現れているのです。つまり、道元禪師が「正伝の仏法」といわれるのは、まさに、自らの仏法がそのまま「正しい仏法」であり、そのまま「釈尊の仏法」だとおっしゃっているのですから。だから、道元禪師を学ぶことそれが釈尊を学ぶことである、釈尊を学ぶことは、道元禪師を学ぶことである。どっちを取るかと言うこと自体がおかしい。「宗学」はそれでいいと思

うのです。

松本先生は、「道元が目指そうとしたもの(正しい仏教)を、目指す」と言われていますが、道元禅師が「目指そうとしたものを、我々が『正法眼蔵』の中から私の判断で取捨選択して探し当てるのではなくて、『正法眼蔵』そのものが、道元禅師がとらえた「正しい仏教」だと思えます。我々が「道元禅師が「目指そうとしたもの」を探求するのではなくて、すでに明らかにされている道元禅師の「正しい仏教」を我々が明らかにすればよいわけです。

〔唐木〕ところで、「釈尊か、道元か」という話ですが、道元研究者が道元よりも釈尊の方を重んじるというのはちょっと変ですね。どっちを重んじるとか、どっちをとるかとか、そういうことがもうおかしいんじゃないですか？道元研究者であれば、道元の著作に現れた釈尊像を研究するわけで、それと原始仏教の釈尊研究者や、他の分野の仏教における釈尊研究者の釈尊像とを比較研究する、というようなことが学問研究ではないのですかね。正邪や優劣や善悪と言った価値判断を入れてはいけないのですよ。

〔原〕そうでしょうか？ 価値判断をいれないのが学問なの

でしょうか？ むしろ、価値判断をするのに客観的な研究を用いていくのが学問なのではないでしょうか？

〔横山〕そういえば曹洞宗宗学研究所の熊本英人先生が、昨年の宗学大会で「現代宗学論の一考察(その三)」と題して発表していますが、そこで、

「主観の入らない研究はない」といったようなことをよく聞かすが、これは、論理の展開がずれている。主観を排除して客観をとるのではなく、主観を客観化、普遍化するのが科学であり学問ではないのか。そのためには客観的な論拠が必要となるのは当然であり、判断は主観において行われるのは間違いない。

(『宗学研究』第四〇号、一九九八年三月)  
と言っています。「宗学」は学問であり、「科学」でなければならぬ。これはポイントとなる視点であると思いますが……。

〔黒岩〕私は「宗学」は学問であっても科学ではないと思います。宗学は、宗祖を敬い、参じてゆくため学ぶ道を示すものであって、宗祖や宗典を科学的に批判的に研究するものではないと思うのですが、このような見方は古くさいでしょうか？

〔司会〕問題がずいぶん大きくなりました、「学問とは何か」

という話題になってしまいました。確かにポイントとなる重要な問題だとは思いますが、收拾がつかなくなる恐れがありますので、話を戻しまして、どなたか別の方、いかがでしょうか？

〔福沢〕私は、何が基準になるのか、ということが問題だと思えます。道元禅師を基準にするのか、釈尊を基準にするのか、あるいは自分を基準にするのか。

〔司会〕「自分を基準にする」というのはどういうことですか？

〔福沢〕ちよつと言葉が適当でないかもしれませんが、吉津先生の「自灯明」ですね。……つまり、私が何を言いたいのかと申しますと、道元禅師を基準にするのが「信宗学」で、釈尊を基準にするのが「批判宗学」で、自分を基準にするのが「やさしい宗学」だと、そんなふうに考えるのです。

〔司会〕「新宗学」は何を基準とするのですか？

宗学とは何か（角田）

〔福沢〕やはり道元禅師を基準にしているのではないでしょう

うか。あるいは、道元禅師の客観的研究そのものでしょうか？

とにかくですね、私は、道元禅師の「正伝の仏法」を基準にするのが「宗学」で、釈尊の「正しい仏教」を基準にするのが「仏教学」であると考えます。ただ、基準が違うだけで、基本的には同じです。つまり、「正しい仏教」から見て「道元禅師にも誤りがあるのだ、問題点があるのだ」から見て「釈尊にも誤りがあるのだ、問題点があるのだ」ということもありうるわけです。この「正しい：何か」を「私」とすることだっており得るわけです。吉津先生の「やさしい宗学」はそこまでいってしまったのではないですかね。

とにかく、その人が、何を基準にするのか。「道元禅師」を基準とする人はそれでいいわけです。「釈尊」を基準にする人が、道元禅師は「間違っている」とか「問題点がある」と言うのは筋違いです。「異なっている」というのならいいですがね。宗学はやはり道元禅師を基準とするはずですよ。

〔黒岩〕ちよつと関連してですが、松本先生は、密教を、正しい仏教ではないと否定されますが、私も、いまの「私の基準」から申しますと、密教を否定するのは当然だと思つている者ですが、初期の道元は密教的であるとの決めつけは、松本先生の考えでしょう。密教と衣装を着せておいて、だから認めないというのは、論証としては正しい方法とは認められません。密教というのと密教的というのと、違うと思つのです。この言葉を使つてゐるかとか、そういうことではなくて……よい例ではないかも知れませんが、卑近な例として、日本に限らず、米国でも、〇〇は共産主義に通じる思想だから、排除すべきだという、……アカだから間違ひ……の論法には、嫌という程苦い経験があります。そういうことが、学問研究においても起こると思つのです。それは、あまり好ましいことではないと思つのです。

それから「信宗学」についてですが、道元禪師を基準にするといつても、その基準にすべき道元禪師の中に、いろいろと矛盾点があるわけですね。出家と在家とか、大修行と深信因果とか、只管打坐と自未得度先度他の関係とか、行か智か、信か学か、等いろいろとあるわけですね。その辺のところを「信宗学」は今後、明確にしなければならぬでしょう。どちらか、というのではなく、

どのように解決できるのか。

それから、「新宗学」についても、元々、前提としての「伝統宗学」があり、それに対して文字通りに批判することを主眼とする「批判宗学」があり、それに反して、道元を擁護する立場に立った「信宗学」があるわけですから、この三者を同じ「主観的」象限に、一つに括つてしまつて、それに対して、自らを歴史的、客観的立場に置くことには問題があると思ひますね。だいたい、「批判宗学」にも「信宗学」にも、きわめて客観的な研究があるわけですから……。

つまり、「批判宗学」には、その批判の基準ともなるべき「仏教」の定義があるわけで、最終的な判断は、やはり主観に基づくといつても、その判断に至るまでには、きわめて学術的、客観的な研究に基づいていますね。そういうレベルでは、「新宗学」として主観的な部分は当然あるはずですから……。

それは、「信宗学」も同じで、「道元禪師の教義を、その文献に基づいて、可能な限り客観的に（\*主観を完全に交えないことは、おそらく不可能であるから）に研究する」とありますから、あくまでも客観的研究を目指しているわけですね。それは、道元禪師の歴史的研究においても同様だと思ひます。



「新宗学」は「新」を付けるからには、もっと新しさを、特に「批判宗学」との明確な相違を出すべきです。

それから「やさしい宗学」についてですが、「自灯明」の大切さは分かるのですが、ここまですると「学」ではなくて「道」というような感じがします。「学問」というよりも「仏道」ですね。いや、やはり「仏」も取らななきゃいけないんでしょうね。そんな感想を持ちます。ちょっと言葉は悪いですが、「自己」が基準になると「なんでもあり」というようなことになってしまいうような気がします。もちろんそこには自己の責任性が問われるとしますが……。とにかく個性が発揮されますし、大きな可能性を持つことは確かです。しかしこれは、大力量の人でないと歩めない道ですね。

ちよつとしゃべりすぎました。失礼しました。

〔司会〕あまり、残された時間もないようですので、最後私の方から、重要に思われる問題を提起したいと思うのですが、これまでの「宗学」に対するものとして、「批判宗学」「新宗学」「やさしい宗学」の中に、ほぼ共通の主張があるんですね、その点についてです。たとえば「批判宗学」では「7. 批判宗学は、本質的に、社会的（「誓度一切衆生」でなければならぬ）」としていますし、「新

宗学とは何か（角田）

宗学」では「8. あるべき教団の教化学へ提言できる視点」「9. 教化学への提言」という言い方をしています。「やさしい宗学」では、：横山先生の資料には出ておりませんが：「現実の社会的諸問題への具体的提言」をすべきであるとしているわけです。

新たな「宗学」の提言者が、一様にこのような社会性を言っていることは、私には非常に興味深いのですが、この点についてはいかがでしょうか？

〔横山〕なんだかですね。これまでの「宗学」には、社会性が全くなかったかのような言われ方なんですけど、そんな印象が、皆さんのなかにお有りなんでしょうか？

〔原〕坐禅だけしていればいいというような、そんな感じをやはりうけるわけです。それに、「只管打坐」と「自未得度先度他」はどうも結びつかない。坐禅は所詮自利行ですから……。それにこれまでの宗学は、師家や老師の提唱のようで、非常に難しい。ほんとうに分かって言っているのでしょうか。

〔横山〕そうですね……。

しかし、坐禅は、決して自利行ではありません。自利

行と言えば自利行なのですが、道元禪師が『普勸坐禅儀』を撰述された意義を考えてみれば、これは、普く人々に坐禅を勧められたわけです。普く人々に安心を与えようとされたわけです。坐禅そのものが、もし自利行であっても……私はそうは思いませんが……普く勧められたということを重んじるべきですし、その点においては利他行です。我々はその利他行をも実践することが大切で、つまり、坐禅を普及することが道元禪師門下のつとめだと思ふのです。

それから、師家の提唱が難しいと言いますが、そうばかりでもないでしょう。多くの在俗の信者を得ていた師家や眼蔵家や禅定家や宗学者は、結構おられますよ。人によるのではないのでしょうか。

〔小林〕私、仏教科のOBですが、一般人の一人として申し上げたいのですが、一般の人は十人十色ですので、できるだけ多くの人にわかるようにと、お坊さんも先生方もわかりやすくということを目標にされます。そうしますと、当然のことながら話題もわかりやすい一般的なものになります。そうして、一般向けのわかりやすい法話、一般向けのわかりやすい本が、一般の人に伝えられ、手渡されることになります。

ところが、一般の人が求めているものは、本音を申しますと仏法、宗旨なのです。いま、蓮如さんがもてはやされています。私も五木寛之さんの本を二冊読みました。蓮如さんは、万人が認める俗の権化です。何故いま俗の権化なのかを考えてみますと、一般の人が仏教に求めるものは仏法、宗旨だとそれがわかってきて、それを伝えてくれる人なら、誰でもいいのです。仏法は無我にて候、という言葉は、これを展開しますと諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜（一般にはお浄土）の三法印になります。お坊さんや先生方の折角の配慮が、結果的には一般の人を仏法から遠ざけることになるのは、わかりやすくするという手段を、目的にされているからだと思いました。

〔司会〕ということは、一般の人は、かえってほんものを求めてるってことですね。

〔小林〕そうですね。「仏法そのもの」を知りたいというのでしょうか。「宗旨」をずばり教えてもらいたいというのでしょうか、「ほんとうだな」と思えば、真剣に学びますもの。

〔司会〕今日は、仏教科の学生さんやOBの方も大勢いらっ

しゃいますが、学生さん、いかがですか？

〔学生〕道元禅師の難しい言葉なんかを、あまり教えてもらえないじゃないですか。難しくてわからないっていうのもあるけど。でも、難しくてわからなくても、なにかそういうものに引かれるし…、ただ、わかるように教えてもらいたいです。全体的に、授業は難しくて全然わかりません。

〔司会〕まあ、これはまた別の問題だと思いますが、先生方には、もう少しわかりやすい授業をしていただきたいと…。

〔大円〕ちょっと話を戻しますが…、「仏教」は、やはり社会的でなければならぬと思うのですね。そして、「宗派」…「曹洞宗」もそうです。仏教教団が、そして曹洞宗が社会的でないとしたら、これは問題だと思うのですね。ただしですね、「仏教学」とか「宗学」とか「○○学」ということになる、これは個々の細部にわたる研究が含まれるわけですから、その個々の研究が、みな社会的であるということはないんです。

それから、「伝統宗学」はむずかしいとか、社会にかか

宗学とは何か（角田）

わっていないとか、「信宗学」は社会的でないとか、そういうことはないと思うのです。「○○学」は、「学」であつて、場合によっては、この「学」が社会とも大きく関わるわけですが、何といつても社会と密接に関わるのは、個人ですね。個人の生き方です。

「やさしい宗学」では、「信宗学」を「甘い宗学」と位置づけ、「道元だけを見つめて、一切衆生の立場、具体的には社会の諸問題への提言や取り組みが忘れられているようなことでは、「甘い宗学」の謗りも免れない」としていますが、道元禅師を見つめながら、深く信仰しながら、社会の現実問題とも大いに関わろうとし、実際に関わっている青年僧侶は、私の周りには大勢います。「やさしい宗学」は、人間、人間といいながら、そういう人間の存在を見ていないように思います。

〔原〕まあ、そういう人も居るでしょうが、問題は、これまでの宗学に、そういう面、つまり、社会を断絶するような面があったということでしょう。それはそうなんじゃないですか？

とにかく、「批判宗学」が今後、社会的でありうるのか、「新宗学」が、具体的に今後、どのような「教化学」への提言」を行っていくのか、そして「やさしい宗学」が

今後、どのような「現実の諸問題への具体的提言」を行っていくのか、そして「信宗学」はこれらの新しい「宗学」の批判をどう受け止めるのか、大いに注目したいと思いますね。そして、もちろん、この私も、傍観者ではないいけないと思っています。

〔司会〕さて、そろそろ時間もまいりましたし、今、原先生の方から、適当な、まとめのような御発言もいただきましたので、このへんで討論を終了させていただきたいと思えます。

この問題は、けっして「宗学」だけの問題に限らないという感想を持ちました。「仏教学」全体の問題、そして「学問」とは何か、という問題でもあるのだと。

あるいは、曹洞宗にかぎらず、他の宗派も、宗教も、同様な「学問」に関わる問題をもっているのではないかと。

いろいろな意見が出されまして、まとめるというようになわけにはいきませんでした。有意義な討論会であったと思います。どうもありがとうございました。

\*冒頭にも申し上げましたが、この討論会はフィクションであり、実際に行われたものの記録ではありません。しかし、「宗学とは何か」という議論が現在進行中であることは事実であり、この事実にもとづいて、架空の人物が討論を行っているというかたちをとっています。(架空の人物の発言の中には、実在する人物の発言がそのままのかたちで、あるいは多少手を加えたかたちで含まれている部分もあります)虚構とは言え、それらの発言に対しては、筆者として責任を負うものであります。このような虚構を執筆し、また本誌に掲載していただくにあたり、戯れが過ぎるとのご批判もあろうかと存じますが、その目的が、駒澤短期大学仏教科の学生を対象にしたものであり、この問題の存在を知らしめんとすることにすることをとお汲み取りいただき、ご寛容賜りますことを切にお願い申し上げます。